
ラヴィ・ツ・レビは旅をする

横山紅葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラヴィ・ツ・レピは旅をする

【Zコード】

Z9146M

【作者名】

横山紅葉

【あらすじ】

家族を亡くして独りぼっちになつたラヴィ・ツ・レピは、祖父の最後の願いを叶えるべく村の北西にあるという“シャの湖”を探しに出かける。

その道中でラヴィの身に起つる出来事をまとめたファンタジー物語。

旅立ち（前書き）

精霊や魔神が出てくる予定のちょっとしたファンタジーです。進みは遅いです。頑張ります。

旅立ち

一、

『わしらの村の、北西にある湖・シャの湖には精霊が住んどった』

祖父は、死ぬ4日前に思い出したようにそう話した。
獵師だった祖父は青年時代、仕留め損なった熊に襲われて肩を負傷
し、瀕死のところをシャの湖の精霊に助けてもらつたことがあるそ
うだ。

僕は、シャの湖なんて知らない。

『一度枯渇した。だがまだそこにあるはずじゃ』

枯れたのは、わしのせい

わしのために精霊は命を削つた

いつの時代も精霊は人とともにある。忘れられた湖に、精霊は住め
ない。

『ラヴィ』

病床の祖父は震える手で僕の手を強く握り締めた。

『ラヴィ、わしは今まで精霊のことを忘れどつた
湖を元のようになす……そして精霊に恩返しきを……』

そうして祖父は逝った。

祖父はあの時話が出来る状態ではなかつたかもしれない。
それでも最後の力を振り絞つて僕に頼みごとをしたのだ。

幼いころに母を流行り病で、父を事故で亡くした僕には、残つた身
内は祖父だけだった。

僕は涙よりも先に、北西の湖を田指した。

悲しみを紛らわすため、ただそれだけのために。

クム爺さん

一、

小さい時から僕を可愛がってくれた隣のアリューおばさんは、しばらく家を留守にすると言えにいった。

おばさんは一瞬驚いた顔を見せたが、何も聞かずに僕にショウウの実が入ったパンをくれた。

かごいっぱい持つて行けと言ってくれたが、食べきれないからと断つた。

ショウウの実は、食べると体が温まる効果がある。

これから厳しい冬を迎える僕らの村にとつては無くてはならない食べ物だ。

おばさんの優しさに感謝しつつ、僕はおばさんの家を後にした。

数百歩進んで後ろを振り返ると、おばさんはまだ僕を見送ってくれていた。

大きく手を振ると、腕が千切れるのではと思われるほどおばさんは僕に手を振り返した。

「ラヴィ！ 村はずれのクム爺さんを訪ねな！ ボケてさえなければ、何か教えてくれるはずだよーーー！」

おばさんは、何も言わなくても、僕が何をしようとしているのか、何となく分かるのかもしれない。僕は再度大きく礼をした。

クム爺さん。

僕の祖父のことを若造呼ばわりする、年齢不詳のじいさんで、魚釣りの名人だ。

僕は数回しかあつたことがない。

昔は、僕の家の近所に住んでいたそうだが、クム爺さんが近所の飼い猫たちに際限なく釣った魚をやつていたら肥満猫が急増したそうで、村はずれへの引越しを余儀なくされたそうだ。何だかかわいそうな気もするが、お気に入りの川から近くなったと本人は喜んでいたらしい。

魚を釣るために、村から歩いて3日かかるリトンカ海にまでいったというのだから、この辺りの川や湖には誰よりも詳しいはず。シャの湖のことについても何か知っているかも知れない。

僕はクム爺さんの家へ急いだ。

* * * * *

クム爺さんの家は、薦で覆われていた。生活感が感じられない。ここに本当に人が住んでいるのだろうか。

最近爺さんの顔を見たという人もいないし、まさか…

鍵のかかった扉を無理に開けようとする僕の背後から、若い男の怒

つた声が僕に投げかけられた。

「誰? 何してゐるの」

振り返ると、そこには髪の長い男がいて、うんざりした顔で思いつきり僕を睨んでいた。

顔立ちからすると僕と同じくらいの年かも知れないと推測できるが、背は僕より随分高い。

「クム爺ならいないよ」

男は眉間にしわを寄せたまま僕の方に近づいてきた。

「また新たな漁場を探しに出てつて20日が経つかな」

今度こそ帰つてこないかも、といいつつ男は持つていた鍵で玄関の扉を開けた。

「まあ入りなよ」

どうしたものかとためらつ僕を見て、彼は今度はクスリと笑つて言った。

「俺?俺はジンニー・ジン。爺さんがい間この家を管理してる。鍵だつて爺さんから直接預かつたんだよ」

彼は管理、といつたが、薦が伸び放題のクム爺の家は綺麗に管理されていくようには見えなかつた。彼はクム爺さんとどのよつな関係なんだね?。不思議そうに見つめる僕にかまわず彼は喋り続けた。

「村の人達は毎日のように食べ物とか酒とか持つて爺さんの様子を見に来るんだ。どうしてあの人あんなに人望があるのか、毎回毎回『爺さんは旅に出ました』って言うのも面倒くさいよ。うんざりするよね」

ああ、それで機嫌が悪かったのか。

「あんた俺と同じくらいだろ？ 爺さんに何のようだったの？」

僕はこの男が一体何者なのか分からなかつたが、なぜか質問には答えなければならないような気になつて、今までの経緯と、これから予定を話した。

「ふーん」

彼は僕に椅子を勧め、手際よくティーを入れてくれた。ショウの実のティーだつた。アリューおばさんを思い出して僕はクスッと笑つていた。

「どうしたの？ ショウの実、嫌いだつた？」

さつきも貰つたのだと、アリューおばさんに貰つたパンを男にひとつ差し出した。

彼は、「君は体がポツカポ力なんじゃないか」と笑いながら僕の差し出したパンを受け取つた。

そして今まで食べた中で一番うまいよ、と男はおいしそうにパンを

ほおばつた。

おばさんのパンを褒められると、何だか僕が褒められたような氣になつて、僕も嬉しくなつた。

男は、不思議なほどに話しやすく、旅の前に感じていた緊張が少しずつほぐれしていくのが分かつた。

話を始めて半刻が過ぎ、そろそろ暇を請おうとティーを飲み干した時、僕は初めて男に違和感を覚えた。

…影に、角が生えているように見える。

「爺さん探しに行くより、そのシャの湖の方へ行つたほうがいいんじゃない？爺さんは確か南のバーン海を田指すといつていたよ。森の木一本より大きい魚がいるんだってさ。」

僕は返事をするのも忘れて彼の影を凝視していた。その視線に気づいた彼は、僕の見つめる方を田で追つた。

「あ。」

しまつた、と彼は叫び、慌てて立ち上がつた。

「君のおばさん、もしかしてパンの中にショウの実のほかに何か入れてる？」

彼が何かブツブツと囁えると、見る間に彼の影の角のようなものは消えていった。

そういえばアリューおばさんは、パンの材料として、元気の元だといつていつもタンファの葉を乾燥させたものを入れてはいるはずだ。

「タンファーーー人には薬でも俺たちには毒だーーー」

彼は急いで水を飲み、もう一度ブツブツと何かを呟えた。

「俺たちジン族がタンファを食べると、気づかぬいうちに獣たちの好物のにおいを発するようになるんだ。…囮まれてなきゃいいけど」

といこいつつ恐る恐る窓から外を眺める。

「ああ、爺さんに怒られる」

彼はあるでいたずらが過ぎた少年のよつよつ悪い顔をして僕を振り返った。

「狼が二十匹くらいいる……そのほかにも何か色々いる」

彼の言葉に驚いて、僕も急いで窓辺に寄り、恐る恐る外を見た。

ありえない。本当に数十匹の狼がこの家を取り囲んでいる。他には、熊や狐、鷹：

そして集団の狼たちは少しずつ、家の距離を近づけていた。

僕は状況を飲み込めない。

一体何が起こったんだ？

そもそもジン族って何？

彼は困ったようにじどうもじどうに僕の質問に答える。最初の威圧感は嘘のように消えてくる。

ひどく背の高い彼が、ひどく幼く見えた。

本当に縮んでやしないか？

「ジン族は大地の精霊エアダイの流した血から生れた魔族のひとつだよ。そういうえば最近の人は精霊だのなんだの信じないんだっけ？俺たちは森に木を植えて、その木の実を食べて生活している闘う力を持たない小さな魔人だよ」

そう言うと彼の体は見る見る小さくなつていき、僕の身長の3分の一程の大きさになつっていた。耳は大きくとんがり、顔は子供のようだった。角のように見えたのは、彼の大きな耳だったのか。僕は夢を見ているのかと思い、2・3度頬をつねった。

夢じゃない。

祖父も言つていた、精霊。そして目の前の彼は魔族。すぐには状況を理解できなかつた。

精霊は、人が信じなくなればそこには住めない、んだつたつけ。

「クム爺さんの植えたこの薦は精霊を信じてるつて証なんだ。だから俺も、平気で出てこれるし精霊を信じない君にだつて見える。ただ、調子に乗つて今みたいにしくじるから、爺さんのいないとこでは人の格好はするなつて言われてたのに…」

何日も留守にしたら無用心だろ。それで俺が鍵を預かつてちょくちよく様子を見に来ることにしたんだ。でも、人がたくさん尋ねてくるし、不審がつてゐるから、俺がいたほうが安心かなつて思つたんだ。

と、今にも泣き出しそうな顔で呴くように弁解している。実際に、もういつ狼が扉を破つて入つてくるか分からない。僕も泣きたい。とにかく隠れる場所を探して、僕たちは一人してクム爺のタンスから洋服を全て取り出して、中に隠れた。

扉の金具はガチャガチャと大きな音を立て、ほとんど外れかかっているのが分かる。

「俺は魔力がそんなに強くないから、こおいもすぐには消えないし、獸を追つ払うなんてできない」

めそめそと話を続ける。もうちょっとまじめに魔力の勉強に励んでおくんだつたと後悔している。

「旅を始めたばかりなんだろう?『ごめんね。もう、出来そうにないね。大丈夫。獸が食べたものは大地に帰るから、死んでも精靈エアダイが祝福してくれるよ』

いや、死ぬことを覚悟しないで欲しい。僕はシャの湖を探さなきやいけないし、そこに住む精靈に会つて祖父の話をしなきゃいけないんだ。

「そういうば、名前を聞いていなかつたね。最後に聞かせてよ」

彼がそう言つたとき、ドン!と一際大きな音がした。恐らく壊された扉が倒れた音だろう。

ザザザザと得体の知れないたくさんの足音が僕らのいるタンス目掛けてやつてくる。

このタンスは下一段が引き出し型で、上は扉を開けると手前が鏡、奥が外套などの洋服をつるすようになつてゐる。鏡をずらすとその洋服がけが現れる仕組みだ。

狼たちが器用に鏡をずらせるとは思わないが、においを追つて力任せに破られると終わりだ。

ガチャリ。タンスの扉を開く音がした。

僕はギュッと目をつぶり、息を呑んだ。

どうしてこうなつてしまつたんだと考へる余裕なんてなかつたけど、ただ心臓はひどく早く波打つていた。張り詰めた気持ちの中で彼の質問に答えなかつたことが心残りになるんじやないかとふと思つた。

僕の名前。

僕の名前は、

「レピ」

ズッと鏡がずらされ、急に視界が明るくなつたのが分かつた。

* * * * *

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9146m/>

ラヴィ・ツ・レピは旅をする

2010年10月9日22時11分発行